

最終講義

ゴルバチョフのノーボエ・ムイシレーニエ

村田克己

一 はじめに——初代理事長・学長の言葉

最終講義にあたり、最初に次の二つのことを記憶にとどめ、考えて頂きたいと思えます。

一つは初代理事長とも言うべき大木遠吉とよ司法大臣の言葉です。それは全国裁判官会議の席上で述べた「法曹家よ、化石の森を出でよ」という言葉です。法学部に学ぶ学生諸君、ぜひこの言葉をめぐって発言の背景や意義・役割などを議論して下さい。

注・大木遠吉伯爵は原敬内閣及び次の高橋是清内閣において大正七年九月二七日から大正一一年六月一二日まで司法大

ゴルバチョフのノーボエ・ムイシレーニエ (村田)

臣、次の加藤友三郎内閣では鉄道大臣（大正一二年九月二日まで）を歴任。大東文化協会の初代会頭で大東文化大学の前身大東文化学院を設置した人物です。佐賀出身、明治の功臣、大木喬任伯爵の子です。

第二番目は初代学長の平沼騏一郎男爵が、昭和一四年一月五日、首相の印授を帯び同年八月三〇日辞任しますが、その際「欧州の天地は複雑怪奇な新情勢を生じた」と述べたことについてであります。

平沼内閣は、近衛内閣から引き継がれたドイツ、イタリアとの三国軍事同盟問題を強引に締結しようとした陸軍へのはかない抵抗内閣でありました。

日独伊の武力援助は、ソ連のみを対象とし米英との対決

をさけようとする海軍や、外務省の主張に対し、ドイツの要求する包括的な軍事同盟を、早期に結ぼうとする陸軍との意見対立や、同盟反対などはさまにあって、平沼首相は決断をつけることができなかつた。三国同盟が日本政府をゆさぶっていた五月、陸軍は政府の意向に反して外蒙との国境付近で外蒙軍と衝突し、ノモンハン事件を起こしてしまします。そして八月二〇日ノモンハンで、ソ連軍機械化部隊によって日本軍一個師団が壊滅的損害をうけました。七月には日米通商条約の廃棄をアメリカが通告してきます。それで米、英、中国、和蘭による、所謂A B C D包囲陣が出来、日本は非常な苦境にたたされます。

そこへもってきて八月二三日、独ソ不可侵条約が結ばれました。日独伊防共協定で共通の仮想敵国としていたソ連との間に、しかも、ソ連とノモンハン事件で日本陸軍が戦闘をしている最中に、ドイツはこっそりとソ連との間に不可侵条約を結んだのです。パワーポリティックスの現象はまさに寝耳に水の衝撃であったようです。

何ともやりきれない日本の政治の拙劣さを反省させられ

ます。孤立した日本が国際間に如何に処していくべきか、情報獲得の重要性と、それにもとづく政治判断の重要性をしっかりと頭にたたきこんでおいてほしいと思います。ジャパン・バッシングの今日、いかなる対応をするか、その選択が現実の問題として浮上しています。

二 書記長になるまでのゴルバチョフ

さて、本日の講義の課題は「ゴルバチョフのノーボエ・ムイシレーニエ」についてであります。ロシア語で「新しい思考」といわれているものです。ここ数年、ソ連共産党書記長ゴルバチョフは、世界をゆさぶる大政治家として注目をあつめ話題を呼んでいます。このゴルバチョフという人物はどんな思想と行動をもっているのか。どんな経歴を経てきた人なのか、について私の調べたことを諸君に伝えたいと思っています。もっとも私はロシア語が読めませんからすべて、西側の人びとの書いたものを参考にしていきます。いわゆる第二次資料にもとづいていることをお断り致しておきます。

諸君の手許に参考資料が配布してあります。第一は昨年（一九八九年）中に起こった東欧諸国の政治変動を表したもので朝日新聞の記事です。次はゴルバチョフが昨年一月二六日、ソ連共産党機関紙プラウダに掲載した「社会主義思想と革命的ペレストロイカ」という論文の抄訳です。これも朝日新聞です。

三枚目はソ連で問題になっている一九七七年ソ連憲法の第六条の写しです。四枚目は一九八六年、ソ連共産党第二七回大会に提出、採択された党綱領、党規約のソ連共産党についての規定であります。

（二）ゴルバチョフの少年時代

さて、ゴルバチョフの正式の名前は、ミハイル・セルゲービッチ・ゴルバチョフです。一九三一年三月二日生まれ、今、五八才です。もうすぐ五九才になります。日本の海部俊樹首相と同じ年です。同じ年だということは、第二次大戦をはさんで戦前、戦中、戦後を経験してきているわけです。体制は違いますが同じように政治の世界を歩いて来ているから、新しい世代の感覚には相通じるものがある

るのではないかと思います。従って今回の東欧訪問に際してゴルバチョフ、海部会談を実現して欲しかったと残念に思っています。

余談はさておき、ゴルバチョフが生まれ育った土地は何処かと申しますと、ソ連邦を構成している中核のロシア共和国の南部地方、黒海とカスピ海とに挟まれた北コーカサス地方（北カフカス）の中央部です。コーカサス山脈が東西に走っていますが、その山脈の北方山麓にスタブロポリ市があります。その北西方一六〇キロのところにあるプリポールノエ村でゴルバチョフは農民の子として生まれました。祖父も父も共産党員で、集団農場で働く農民で純粋のロシア人であったようです。

ソ連の学校は十年制教育制度になっています。小学四年の過程を終り、五年生の学期の初め三カ月の休学をしたりして中学課程に入るのに遅れているようです。それは一九四二年の八月から翌年一月末まで、スタブロポリ市がナチスドイツ軍の占領下にあったからのようです。ゴルバチョフ一才の頃の体験です。前線の近くで麦刈りをやったこ

とを後年ゴルバチョフは人に語ったそうです。この頃のゴルバチョフの家は貧しくて靴が買えなかったようです。前線に出征していた父親から「ミハイルの靴を買うためには何でも売れ、ミハイルは学校に行かねばならない」と手紙を母親によこしたそうです。ゴルバチョフは真面目な勤勉な勉強家であったようです。一九四五年五月、大祖国戦争が終わると父親が帰還して郷里に帰って、戦前からの集団農場のコンバイン運転手に復帰し、ミハイルと一緒に畑で長時間を過すことが出来るようになります。一四才のゴルバチョフは父のコンバイン運転の助手として、時には自ら運転をして一人前の大人の仕事をしたりしています。

ソ連の子供たちは、小学生の頃はピオネールに入り、一四才になると資格審査に合格したものはコムソモールのメンバーになります。青年共産党員です。ゴルバチョフは学校の成績もよく、集団農場の辛い肉体労働もよく耐えてやりとげ、コムソモールのあらゆる義務を熱心に果たし、他の若者と違って近所隣りのこまごました世話もよくやり、学校・工場での宣伝工作など熱心にやるなどコムソモール

の中で際立って指導者の資質をあらわし、地方党幹部に強い印象を与えたようです。

ゴルバチョフの働く集団農場が、大変な収穫をあげたのでその一員として、一八才という若さでゴルバチョフは労働赤旗勲章を獲得しています。おそらくコムソモール内外のあらゆる仕事に打ち込んだ勤勉さが評価されたからでしょう。スタブロポリ地方党委員会からその前途を期待された若者だったのでしょう。

銀メダルで学校を卒業したゴルバチョフは、モスクワ大への地方特待生に推薦を受けることになりました。

ゴルバチョフの少年時代は、石油ランプと堀立小屋の簡素な農民の生活でした。学校教育やコムソモールの活動の中で、純粋ロシア人として祖先から受け継いだ祖国ロシアへの愛国心を育てられ、ドイツとの闘いで一層強化された祖国愛の持主となり、ソ連のイデオロギーであるマルクス・レーニン主義をたたきこまれて模範的共産主義青年として成長し、高等教育を受けるため初めて故郷を離れて首都モスクワ市へ向かうことになりました。

(二) モスクワ大学法学部の学生生活

一九五〇年九月ゴルバチョフは故郷を去ってスタブロポリ市からモスクワへ一六〇〇キロの汽車旅行をします。ソ連の首都モスクワでの大学生活へ心はずむ思いで希望に燃えた旅であったことと想像できます。しかし、彼が車窓から見た光景はすさまじい独ソ戦争の傷跡ばかりでした。大戦が祖国ロシアへ与えた惨害に驚き、戦後ソ連の現実に目を開かせるショックな光景でした。スターリングラード（現在ボルゴグラード）ロストフ、ハリコフ、オリョール、ボロネジなど鉄道沿線の都市は廃墟になっていました。国全体が瓦礫の中にあった。ゴルバチョフの心の中にどのような反響があったか解りませんが、熱烈な共産主義青年には勝利への苦勞を知って偉大なスターリンという尊敬の念をいやましたかもしれません。この年アジアでは冷戦が熱戦化し朝鮮戦争が勃発していました。世界的に共産主義体制への進展が勢いづいていた時代でした。

モスクワ大学ではゴルバチョフの第一志望は理学部だったそうです。だが結局は、当時ソ連の若者には人氣がなく、

ゴルバチョフのノーボエ・ムイシレーニエ（村田）

出世志向の若者にとって第一に志望する学部ではなかった法学部に入学することになります。

日本の大学における法学部志向の高さと比べると、何故だろうと疑問が起きます。ソ連では法律の仕事の權威が非常に低かったのです。マルクス・レーニン主義の教義の下では法概念そのものが遅れていました。特にスターリン時代のソ連法律家の実務は、二千年の歴史をもつ西側の法学に比べようもなかったのです。スターリンの独裁体制下にあつては、独裁者の言葉が共産党の名において法律になるわけで、スターリン独裁はただ一つの法律しか認めていなかったのです。

法学部卒業生のほとんどは、検事局あるいはKGB（国家保安委員会）に就職しました。自尊心を持つ学生には魅力のある職業では無かったようです。問題は恐るべきスターリン肅正の影響があつたのでしょう。一九三六年、三七年、三八年の大肅正が必ずしも正しい法の裁きによって行われたと信じられていなかったのではないのでしょうか。

学問の対象としての法学の評判が芳しくないことは、五

○年にソ連で法学部に進学する学生は僅かに四万五〇〇〇人だったことが証明しています。当時のソ連の大学生数一二〇万人のうち僅か五%足らずです。一九五八年、五九年には法学部学生はさらに減少して三万六〇〇〇人になっています。一九五六年には例のフルシチョフのスターリン批判があった年で、社会の緊張は次第にほぐれ始め雪どけといわれていたのにもかかわらず、法律の果たす役割は大したことはなく、法律学科は依然として若者に人気のある学科ではなかったようです。

ゴルバチョフは、法科の不評にもかかわらず、ソ連最高の国立大学モスクワ大学法学部に入学し、一つの学問分野に引き入れられてゆきました。幸い彼の強い政治的関心を磨き上げることに大いに役立つことになりました。ゴルバチョフが精神的にも知的にも寄りどころとして崇拜したソ連の国父レーニンは、法学を勉強した弁護士であったし、歴代指導者中、唯一の大学卒業者でした。このことはゴルバチョフに大いに励みとなったようです。

一九五〇年、モスクワ大学法学部に集まってきた学生に

は次の四つのグループがありました。第一は第二次大戦の沢山の復員兵士たちです。戦争のため徴兵され知的欲求を断たれていた兵士たちがいました。ゴルバチョフは一九才でしたが、彼よりも八才年長でしかも陸軍大佐だったリールマンというユダヤ人もいました。

第二は、モスクワやレニングラードなどの大都会からの入学者ですが小教でした。この学生たちは特権的な党官僚や政府官僚の子弟であるか、党に忠実な専門家たちの子弟でした。ソ連の標準では豊かな生活をしてきた人たちです。

第三のグループは、ゴルバチョフのような小教の地方出身者たちです。このグループは才能に恵まれた政治的に健全な若者たちでした。健全とはソ連政府の広報を信頼し、マルクス・レーニン主義を思考の根本にもつ若者たちでした。このグループの人はゴルバチョフのように「親の影響」を欠いていたと思われる。そうでなければ国内最高学府の中で最も権威の高いモスクワ国際関係大学に入り、将来の国家指導者として複雑な外交や国際法の教育を受けていたかも知れません。だがゴルバチョフがモスクワ大学

以上のものを望んでいたという証拠はありません。むしろ、大学教育を受けることができる喜びで積極的に勉強しようと思っていたと思われます。

第四番目に、これまでソ連にない極めて小さなグループが同級生となっていました。兄弟的社会主义国と呼ばれるソ連の勢力圏に入った東欧の新しい共産主義国家から選ばれて派遣されてきた外国人学生たちです。共産主義への固い確信をもち、帰国後、親ソ的なエリートとして活動することが期待された若者たちで、東独、チェコスロバキア、アルバニア、中国などから留学してきていました。

これらの学生の中にゴルバチョフが極めて親密な友人関係を持つことになったチェコスロバキヤ政府派遣留学生の「ズデネク・ムリナーシ」がいました。ムリナーシは帰国後、チェコ共産党内で活躍し中央委員会のメンバーになり、一九六八年の「プラハの春」を迎えることとなります。彼はブレジネフのスターリン的支配に次第に幻滅を深め、「人間の顔をした社会主義」を主張するアレクサンドル・ドプチェクを指導者にした改革派と運命を共にします。プ

レジネフ・ドクトリンによってソ連の戦車とその夏チェコ改革運動を粉碎したとき、ムリナーシは公的な仕事を一切失い、プラハのある研究所で過ごしましたが一九七七年オーストリアに亡命して、現在ウィーンで研究所の教授をしているそうです。

実はゴルバチョフのモスクワ大学の生活や彼の考えなどが、ある程度明らかにされたのは、このムリナーシがオーストリアに亡命して一九七八年に回想記を出版してからです。「夜寒」という題名です。モスクワ大学の五年間の生活の思い出も含まれているため、ゴルバチョフの人格形成を追及する多くのジャーナリストたちが利用しています。

ムリナーシはゴルバチョフと同じ学生寮に住み、法学部のゼミナールも同じグループに所属していました。熱烈な共産主義者ムリナーシとゴルバチョフは親しく交際し、勉学に、討論に、モスクワ見物に、行動を共にしていました。ムリナーシは田舎者で世界を知らぬゴルバチョフの思考に大きな影響を与えていたと思われます。その上、学生結婚したムリナーシの彼女とゴルバチョフが学生結婚した女子

学生ライサ・マクシモブナ・チトレンコとも共通の親しい友人という関係でもあったのです。

外国人との接触には厳しい監視があった時代であったにもかかわらず、ゴルバチョフはムリナーシを信頼して政治・経済・社会生活全般についての個人的見解を打ち明けていました。学生時代のゴルバチョフの政治思想の情報はほとんどはムリナーシがゴルバチョフと交わした会話の回想から窺い知ることができません。ムリナーシの回想によってモスクワ大学の学生生活も知ることができます。

モスクワ大学法学部の建物は、一九五〇年ゴルバチョフが入学した当時はモスクワの都心部のカール・マルクス大通りにあり、革命前の列柱のある建物で大理石の建物であったようです。モスクワ大学は後に郊外のレーニン丘に聳える三四階建ての豪壮な建物になっています。ゴルバチョフらはここに週六日通学し、午前九時始業、午後三時まで講義やゼミナーを受け、図書館での調べもの、研究などの長い時間を費やすのが日課でありました。出欠は厳しく、然るべき理由のない欠席は奨学金が停止され、ひどけ

れば大学追放の原因になりました。学業と素行の優秀な者には学生が特に必要とする金銭面の援助が与えられました。ゴルバチョフはスターリン奨学金が与えられていたのですが彼の生活の基本を支えていたのです。学業評価は5、4、3、2、1で評価されるので4以下に下がると奨学金が打ち切られるのでゴルバチョフは猛烈に頑張ったようです。

学生の生活の根拠となる宿舎は地下鉄でモスクワ北東部にあるストロミンカ学生寮でした。古い建物で最初の建物はピョートル大帝（一六七二年〜一七二五年）の時代に遡る兵舎でした。学生村と呼ばれたこの建物には一万人の学生で溢れていたそうです。環境は劣悪だったようで、一部屋に六人から一六人位収容されていたそうです。日本の軍隊の内務班を想い出させます。各階に共同の台所と洗濯場がひとつ、それにトイレがあったが、浴場はなかったのです。ゴルバチョフらは月に二度公衆浴場に通って身体の清潔を保ったそうです。質素な部屋には装飾は一切なく、私物は寝台の下のスツケースに入れておくのです。プライバ

シー皆無の部屋でした。私は軍隊生活の経験があるのでその状況がよくわかります。同じ建物内に女子学生だけの部屋があり、雰囲気をはげらげるのに役立つたようです。宿舎の大ホールの文化クラブが憩いの場でした。毎晩のように映画、講演、その他の催しが開かれていたようです。学生の最大の娯楽はアメリカ映画だったそうです。ただし、アメリカは帝国主義国であり共産主義国の敵であったので、何処の国の映画で監督は誰れで俳優は誰かなどの説明は一切なく、観客には絶対に知らされなかったということです。タイトルそのものが写し出されず、これは外国映画ですと説明があっただけだったと回想されています。学生たちの文句なしのお気に入り映画は、ワイズ・ミューラー演ずるターザンだったそうです。寄宿舍で上映されるたびに学生は熱狂し、観終わると若いソ連ターザンたちの雄たけびがこだまするのが常だったということです。若い時に映画を観終わった時の感情は同じなんですね。ソ連政府の当時の秘密主義がオカシイ位ではありませんか。

衣食はどうかという点、奨学金二〇〇—三〇〇ルーブル

ゴルバチョフのノーボエ・ムイシレーニエ(村田)

は食糧などの必需品を買うのもやっとかついでゴルバチョフは一年中、二着のズボンを交互に使用しカギ裂きを作ってもそのままだったそうです。食事はお茶でさえ高価だったので買えない学生は、お湯に砂糖をいれ「学生茶」と皆が名づけた砂糖湯で黒パンを嚙って朝食をすませてから大学へ行ったということです。講義の終わったあと学部内のカフェテリアでとる食事は、一日で唯一のまともなものであったようです。カフェテリアの椅子は一五〇席、常に満席でした。食事は単に食べることが可能というだけの代物で、カーシャというソバ粉の薄粥といった種類だけのものであった、とムリナーシは語っています。第二次大戦の戦勝国ソ連も、一九五〇年代にはまだこのような状況であったのです。敗戦日本の一九五〇年の大学生活も似たようなものでひどいものでした。大学食堂では海草をまぜたソバを食糧の配給切符で食べていたことを思い出します。だがヤミで銀シャリと呼んだご飯が食べられソ連の学生よりはまだよかったのじゃないかと思えます。しかも朝鮮戦争が始まると特需景気になって余程ましな食生活になりま

した。

(三) モスクワ大学法学部で何を学んだか

さて、ゴルバチョフは法学部で何を学んだでしょうか。

ソ連のすべての人文科学コースでは、マルクス・レーニン主義のソ連イデオロギーが必修科目でした。弁証法、史的唯物論、政治経済学、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの諸著作についての講義とゼミナールがありました。マルクス・レーニン主義イデオロギーはソ連の国家構造、したがってソ連法を正当化する中心理論であり法学部講義の中核でした。經典と同じように原著の厳密な注釈が教授されたのです。学生たちは成績をよくするために、必修を求められているマルクス・レーニン信仰に口先だけでも忠誠を誓って憶えたようです。だがしかし、絶えず聞かされているとその影響は一生残るものです。パヴロフの条件反射の理論を思い出して下さい。

ゴルバチョフのように少年時代から学校、コムソモールを通じてたたきこまれ確信的な共産主義者として入学してきた者にとっては、マルクス・レーニン主義の高度な理論

を講義され、彼の信念は理論で武装され、精神的な核を強固にするようになりました。特にゴルバチョフは一〇月革命のレーニンについて深く学び、その才能だけでなく、卓越した知的戦略戦術家として傾倒しました。レーニンが一〇月革命の敵対者メンシェヴィキのユーリー・マルトフに対して比較的人情味のある扱いをした点を、スターリンが敵対者、批判者などを粛正抹殺したのと比較して、レーニンを評価するとムリナーンに語ったことがあったそうです。五二年にモスクワ大学で教えていた「ソ連正史」の教えは、上部機関から指示された方針に反対する者はすべて「反党的逸脱者」で収容所暮らしか、死を意味するものでありました。その名は歴史から抹殺されました。そのようなスターリン主義のさ中でゴルバチョフが「それでもレーニンはマルトフを逮捕せず国外亡命を許した」と異端の説を語ったというのです。正義感ゴルバチョフにとっては考えの基本にはいつもレーニンがあったことを示しています。

法学部ではマルクス・レーニン主義の完璧な知識を要求されるほか、ソ連法だけでなく革命前の法律も扱い、世界

における法一般の理解に欠かせない問題も教えました。ソ連法の科目にはA・ピオントフスキー、V・メンシャギン教授共著の「ソヴィエト刑法教程」があり三〇年代スターリン肅正時の見せ物裁判を社会主義的適法性の範例としていました。自白を有罪、無罪の試金石とするソ連法学会のビシンスキーの路線は、ソ連法教授の間にさえ追隨するものばかりでなく、異端政治論は用心して絶対に口に出さなかつたが、刑法の定義と論評では冷徹にプロ根性を維持した教授もあり、ゴルバチョフは単一解釈でなく相対的、批判的解釈があるという知的訓練を受けたようです。

ゴルバチョフをしてさらに一層広い学問の世界に目を開かせた講義がありました。

法学部は国家についての概念の根本を研究することを許された唯一の学部でした。他学部の学生の耳目には決して触れることは無いものを聞いたり読んだりしたのです。

ローマ法、法制史、国際法、雇用法などあり、学生はハンムラビ法典から現代までの一般憲法、政治思想の変遷、マキアベリの「フィレンツェの歴史」、トーマス・アクイナ

ス、ホッブズ、ヘーゲル、ルソー等の諸著作、そしてアメリカ憲法さえ論じあったのです。ゴルバチョフはラテン語の習得にも努力しています。

講義をする教授の多くは革命前からの生き残りで、政治と全く没交渉であり、大戦、肅正、その他のソ連生活の障壁を乗り越え、学究と教育の生活に専念していた人でありました。その多くは一流の優れた学者で優れた教育者でもありました。

政治思想史の二年過程の担当はステファン・ケチェキャン教授で週四時間の講義と四時間の個別指導でした。ケチェキャン教授の講義は、スターリン主義思想の彼方に以前から存在し続ける知的・政治的世界があることを学生に教えました。教授の学生時代は革命以前であり、スターリン後期の独断的な弁証法などから自由な精神の力を学生に伝え、講義は法学部講義中の圧巻で素晴らしい教師として人気も高く、ゴルバチョフはこうした別の政治思想の講義指導に感銘を受けたということです。ゴルバチョフの知的発見はケチェキャン教授のヘーゲルの講義が特に印象深

かったらしく、ヘーゲルの「真理は常に具体的である」という格言に心打たれていた、とムリナーシに語ったそうです。ゴルバチョフは学生や教師が一般原則のおしゃべりばかりして、これが現実生活とどれだけかわりがあるかを無視している場合に、このヘーゲルの言葉を述べて批判したそうです。マルクス主義理論は暗記すべき公理でなく、世界理解の手段であるのです。マルクスが学んだ先人の諸著作はソ連では検閲されなかったのでマルクス以前の著作の講義は一般に優れていました。アメリカの憲法は、その素晴らしい条文がアメリカの現実生活の中で蹂躪されていると一応教授たちは断つたものの前向きな評価をする講義であったと述べられています。

ムリナーシの回想によれば、ゴルバチョフはソ連政府のプロパガンダのばかばかしさに心底から憤慨していたとのことです。それは集団農場の農民労働者としての労働を長年体験してきたゴルバチョフが、毎日のソ連紙に載る地方の生活の話に疑惑を感じてのことです。テーブルの上に素晴らしいご馳走の山をにこやかな農民が取り囲んでいる写

真を見て、穀草地帯でソ連有数の農業地域の北コーカサス地方の農民の栄養不足の現実生活と比較してこんなじゃないとムリナーシに語ったそうです。ソ連政府の政策の自己礼讃が現実と遙かに隔たっていることを指摘しているので

又、こういうこともあったようです。ある日、年長の復員学生が自分の眼で観たチェコスロバキアの田舎の家屋が煉瓦できており、屋根は瓦で葺いてあることを話したそうです。その頃、ソ連の農村の農民の家屋は粘土や材木で作られ屋根は藁葺でした。地方から来ていた学生にとって自分の生まれ故郷の集団農場で働く農民の家しか知らず、モスクワへ出てきた学生たちにとっては、そんなことは信じられず論争したことがあった。そこでチェコ留学生のムリナーシを呼んで事実はどうかを確かめたところムリナーシの話と復員学生の話は一致したので、世界に誇る共産主義国ソ連の学生たちは聊か誇りを傷つけられたようです。ゴルバチョフは学生たちの他愛のない雑談の中からも世界の現実に眼を開かされていったようです。

ムリナーシも学生結婚しましたが、ゴルバチョフも一九五五年二月、二三才で哲学科のライサ夫人と結婚しています。多くの学生の憧れの対象だった美人のライサを射止めたのは、大学コムソモールの委員としてよき世話役として活躍する颯爽たるゴルバチョフが好感を持たれたためでしょう。学生結婚についてのいろんなエピソードがありますがここでは省略します。

モスクワ大学時代の学生ゴルバチョフに少し時間をとりました。諸君も同じく法学部に学ぶ学生として他山の石になろうかと思ってお話をしたわけです。諸君の中から世界的政治家とはいませんが、何か素晴らしいことをやる人物がであることを期待して諸君のこれからの学生生活に聊かの刺激にもなればと思った次第です。

考えて見れば昨年一月全日本大学駅伝、今年正月の箱根駅伝大学選手権に本学陸上競技部は優勝しましたが、高校時代から秀れた選手として知られていたのは実井選手一人で、あとは皆無名の選手たちです。私は陸上競技部長として創設時からスローガンを「練習によって不可能と思う

ことを可能にしよう」と叫んで参りました。私が最後に大学を辞める時に、青葉監督、選手諸君がはなむけにするんだと頑張って優勝してくれました。無名の選手がやる気を起こして練習に励み頑張ったら有名選手をかかえた他大学に打ち勝って優勝したのです。諸君が何か自分なりの目標を設定して頑張れば必ず成果はあるものです。是非諸君の努力を乞う次第です。また横道にそれました。

ゴルバチョフは一九五五年六月、モスクワ大学法学部を優秀な成績で卒業しました。だが、法律専門職に進まず、故郷のコムソモール・スタブロポリ地方委員会の情報宣伝部次長としての職を得、政治活動を開始し、政治家への道を歩くことになりました。

ゴルバチョフは学生時代の一九五二年一〇月にはすでにソヴィエト共産党に入党を許されていました。大学コムソモールでは幹部として活発に活動していました。夏休みになると故郷へ帰り、集団農場でコンバインを運転して働き、故郷を大切にするゴルバチョフだったのでスタブロポリ地方党委員会が呼び帰したのかも知れません。或は彼をモス

クワ大学へ推薦したのは、故郷に帰って党活動に従事することを義務づけていたのかも知れません。

いずれにしてもゴルバチョフの社会人として共産党員としての行動の第一歩が始まりました。模範的地方党指導者として広い知識は際立っていましたので次第に共産党の階段を登っていきます。そして党地方政治家としての二三年間の経験をひっさげて中央に乗りこみます。それから僅か六年半、遂にソ連共産党書記長の椅子に座ることになります。五四才でした。

かけ足で彼の経歴を履歴書風に追ってみます。

(四) 地方政治家となったゴルバチョフ

一九五五年七月、モスクワ大学を卒業してコムソモールのスタブロポリ地方委員会情報宣伝部次長になり宣伝・政治教育にたずさわる。

五六年、書記、五八年、宣伝部長昇格、コムソモール第二書記。フルシチョフの「学校と生活の結びつきについて」のキャンペーンに賛同し、支持者として「スタブロポリ教育ブリガード」をつくり学童たちの勉学勤労計画を組

織した。これは党中央の眼にとまり全国のモデルとなった。

六〇年、コムソモール第一書記となり、地方委員会にもポストを得る。フョードル・クラコフ地方党第一書記と出逢う。六一年一〇月、第二二回党大会代議員として出席、六二年三月党組織に所属を移し、農業担当となり、クラコフの指導を受ける。スタブロポリ農業大学の通信教育に入學し農業経済学を勉強する。

六二年一二月、クラコフに抜擢され地方党組織部長となる。ノーマンクラトウラに載る党職員である。

六六年九月、スタブロポリ市委員会第一書記となる。三五才。実質的な市長である。この年の春生まれて初めて外国視察のため東独・フランス訪問、国内をくまなく一人で見て歩く。六七年、スタブロポリ農業大学の卒業試験に合格、農業経済学士の免状を受ける。またこの年、チェコ共産党中央委員になっていたマリナシ、スタブロポリに来訪再会。スタブロポリ市立教育大学の講師をしていたライサ夫人、モスクワ教育大学に研究論文「集団農場の農民の日常生活における新しい特性の出現——スタブロポリ地

方における社会学的調査」を提出し、博士候補の免状を受く。ライサ夫人の統計学的実証的研究は、ゴルバチョフに大きな影響を与える。六八年、スタブロポリ地方委員会第二書記・地域農業担当。六九年、最高会議代議員に選ばれ、環境保護委員会委員となる。

七〇年四月、スタブロポリ地方委員会第一書記となる。三九才。七一年、党中央委員会の正会員に昇格、七三年グルジャ共和国のシュワルナゼと逢い農民との契約農業方式に示唆をうけ、請負農業を実施する。この間、慢性的水不足解消のため、川はあるが水がない地方に灌漑用運河を建設する。七四年、最高会議代議員に再選、青年問題委員会委員長。七六年二月、第二五回党大会出席。

七七年七月、ゴルバチョフは独自の「イパトポ方式」実施による収穫の「英雄」とプラウダに報ぜられる。同じ七月二〇日、恩人、党中央委員クラコフの葬儀に無名の中央委員ゴルバチョフは感動的な弔辞を捧げ注目をひく。七八年三月、農業への貢献に対し「一〇月革命勲章」をスタブロポリ市においてスースロフから受ける。

ゴルバチョフのノーボエ・ムイシレーニエ（村田）

一九七八年十一月、四七才のゴルバチョフは党中央委員会書記、クラコフの後をついで農業担当に選出される。二三年間の地方政治家に別れをつけ、青年時代過ごした懐かしのモスクワへ上京する。

スタブロポリ地方政治家にしかすぎなかったゴルバチョフは勤勉誠実で精力的活動家、簡素な生き方、腐敗していない人物、控え目で礼儀正しい謙虚さ、しかも豊富な知識の所有者であったことが保養地、スタブロポリ鉱泉のおかげで当時の書記長ブレジネフ、コスイギン首相、党最大の理論家スースロフそしてKGB議長、中央委員アンドロポフといったそうそうたる時の指導者に逢うことができ、評価され信頼されて中央に呼ばれたといわれています。最も若く有能なゴルバチョフは老人指導者の中にあって将来を託するに足る人物とたのしがられたのでしよう。七九年、政治局員候補に昇格。八〇年には政治局員に昇格、最高会議代議員、八二年、アンドロポフ書記長となるやイデオロギー担当の政治局員兼書記となり党内No.2になる。八四年四月チェルネンコ書記長のもと病身のチェルネンコの代理

として活躍、最高会議連邦議会の外交委員長をつとめ、遂に一九八五年三月、ソ連共産党書記長の座につきま。

三 ゴルバチョフの政治スローガン

(一) グラスノスチ

ソ連共産党書記長になることがどんなことであるかについて簡単に述べておきます。日本の政党の委員長とか書記長になるのとは大いに違います。

一九七七年一〇月に制定されたソ連憲法はブレジネフ憲法と呼ばれています。この第六条に、

「ソ連共産党は、ソビエト社会を指導し、推進する力であり、その政治体制と国家のおよび公共的組織の核である。党は人民のために存在し、人民に奉仕する。マルクス・レーニン主義の学説で武装した党は、社会発展の全般的展望、ソ連の内外路線を定め、ソビエト人民の偉大な創造的活動を指導し、共産主義の勝利のためのソビエト人民の闘いに計画的・科学的根拠をもつ性格を与える。すべての党組織はソ連憲法の枠内で行動する」と規定、ソ連憲法前文

には、ソビエト連邦の基本的性格を次のように規定しています。「レーニンを先頭とする共産党の指導のもとにロシアの労働者と農民が遂行した一〇月社会主義大革命は、資本家と地主の権力を打倒し、抑圧の鉄鎖を打ち砕き、プロレタリアート独裁を樹立して、革命の獲得物を擁護し社会主義と共産主義を建設する主要な用具であり、新しい型の国家であるソビエト国家を創建した」「前人民の前衛である共産党の指導的役割が高まった」とあります。「前衛」とは何を意味するのか、と申しますと、ソ連の体制、即ち共産党独裁体制の存在の基盤、その正統性の根拠はマルクス・レーニン主義のイデオロギーであります。このマルクス・レーニン主義の理論にもとづき社会主義を実現できるのは職業革命家の共産党だということです。プロレタリアートの真の利害と歴史的使命がどこにあり、何を考えてどう行動するべきかを知っているのは共産党だけしかない。諸君はここでジャン・ジャック・ルソーのボロンテ・ゼネラル普遍意思を想起して欲しい。共通の利害を理解し、プロレタリアート階級の普遍意思を実現できるのが、共産党であ

り、それが今や全人民の先頭に立つ指導者、前衛として「見通しをたて」「方針を決定し」「活動を指導」してゆくわけです。ソビエトのイデオロギーによれば憲法や国家機構は目的達成のための道具に過ぎない。従って党は憲法や国家を超える立場にあり、憲法が保障しているから存在し行動するのではないのです。党こそ憲法を制定する根源なのです。従って党は法をふくむ他のすべてを超越した権力を行使するのです。三権分立や法治主義、議会主義を近代民主政治の運営の基本原則とする自由主義的民主主義とは全く発想が違っていることに御注意下さい。行政府や裁判所がありますが権力の分立でなく権能の区分でしかなく、権力は一元的に構成された民主集中制です。ソ連共産党は法を上回るイデオロギーに従って指導力を行使しそれは正当なものです。ソ連共産党の書記長は従って実質的に強大な権力をもつ実力者であります。だが、西側という国家元首でもなく、行政府の長、首相でもありません。

ゴルバチョフはそういった強大な権力をもつソ連共産党書記長になったわけです。従って彼は見通しをたて、方針

ゴルバチョフのノーボエ・ムイシレーニエ（村田）

を決定し、活動を指導して、ソ連におけるマルクスレーニン主義の理想の実現を目指してソ連の全人民を引っ張っていかねばなりません。

ゴルバチョフ書記長の政治を語るキーワードともいえるべきものは、グラスノスチ、ペレストロイカであり、ノーボエ・ムイシレーニエであります。

グラスノスチというのは、いろいろ説明がありますが普通通情報公開と訳されています。ソ連社会主義体制は従来は秘密主義で都合の悪いことは一切知らせないといったことがいわれ、鉄のカーテンの内部がのぞけないのが普通であったのです。そこへゴルバチョフは今までとは全く異質の考えグラスノスチを彼の政治方針として打ち出したのです。最初、官僚の腐敗や行政の非効率を明らかにし、労働者の規律を引き締めるための有効な手段として用いられました。それがスターリン時代への反省や批判をする文学者や歴史家の歴史認識に広がり、さらに経済問題がグラスノスチの対象となり、ソ連経済の停滞ぶりが明らかにされ重工業優先で集団農場を推しすすめ、農民の犠牲において行

われてきたことなども明らかにされはじめました。社会生活の面でも、麻薬やエイズに侵された青少年の存在も明らかにされ、ソ連人民にショックを与えたようです。事故や災害の報道も行われるようになってきました。

一九八六年の四月二六日、チェルノブイリ原子力発電所が事故を起こしました。私は大東陸上OBを引率して、パリ―オリンピック間昼夜を問わず走る駅伝競争に参加して優勝したことがあります。新聞に報道されなかったからこそ存知ないかもしれませんが、陸上競技連盟の推薦にもとづき、何んとリクルートがスポンサーになり、リクルートの「やりがい」の宣伝にうまく利用されてきた経験があります。四月二八日の夜、アルプス山脈を越え、二九日朝イタリアのアオスタ市についた時、町の新聞販売店で、チェルノブイリの原発事故を知りました。ソ連がアメリカの報道は反ソ、反共の謀略宣伝だと批難している記事を読みました。依然としてソ連は秘密主義だったのですが、翌日ローマについて新聞を見たら、ソ連はこの事故発生を認めて事故対策をしていることを知り、ゴルバチョフのグラスノス

チは本物かなあと思いました。その後も原子力潜水艦の事故、シベリヤ鉄道の重大事故、炭坑スト、デモ、商船の事故などつぎつぎに発表するようになりグラスノスチでようやく、ソ連共産党紙プラウダがその名の如く真実を語り、ソ連政府機関紙イズベスチヤがその名の如くニュースを流し始めてきました。

ゴルバチョフはグラスノスチによりソ連人に情報を与え、自覚をもって行動し、積極的に党の計画や綱領目的を支持することを期待しているようです。次にのべるペレストロイカの実現のための手段であると思われれます。

(二) ペレストロイカ

ペレストロイカというロシア語はそのまま世界語になってしまうほど有名な言葉になってしまいました。

ペレストロイカはゴルバチョフは単に「建て直し」といった意味から「革命」を意味する言葉として使われるようになりました。革命とは政治学用語ではブルジョア国家を転覆してプロレタリア独裁国家を樹立することがマルキストのいう革命の意義です。西側ではイギリスで政治体制

の変革があつた場合、ピューリタン革命とか名誉革命、フランスでもフランス大革命といわれています。

ゴルバチョフは革命について「革命は、時代遅れのもの、停滞したもの、発展を疎外するものすべてを解体する。ペレストロイカもまた社会・経済の発展を阻害する障害物を断固として根こそぎ排除することになる。時代遅れの経済運営、教条主義的な硬直化した考え方を改革するのである」と従来の共産主義イデオロギーの枠を越えた新しい言葉の用法を説明しています。

ペレストロイカは内政に関して言われています。国内の体制の改革について用いられています。外交のペレストロイカとは言っていません。新時代のソ連外交についてはゴルバチョフはノーボエ・ムイシレーニエといっています。

八七年一月の党中央委総会でゴルバチョフの報告で、ペレストロイカはなぜ必要になってきたのかと問いかけ、ペレストロイカを必要としたのは社会の発展における矛盾の増大であり、これらの矛盾はしだいに蓄積され、適時に解決されることなく実質上危機直前の形態を帯びるに至った。

と述べています。危機直前とか矛盾とは第一に深刻な経済の停滞です。ソ連の国内所得の成長率が、過去三回の五年計画、つまり過去一五年間に二分の一以下に落ちてしまったことです。第二に、労働に依じて分配するという原則が侵され悪平等が一般化して労働意欲が低下したことです。第三にその結果社会的モラルが衰退し、アル中、麻薬中毒、犯罪の増加をきたしたことで、第四には党・政府官僚の腐敗墮落したことでした。

ペレストロイカの実態は、第一に政治改革において政治的民主化の拡大です。必要なのは何よりもまず選挙の民主化です。選挙で複数候補制と秘密投票制を採用し、実施し始めました。八八年六月の全連邦党協議会では、党役員も複数候補をたて任期は五年にきめ再選までは認めることをきめます。複数候補を出して秘密投票を実行する。任期を限定するといったことは西側諸国では普通に行われている民主主義の制度です。

第二は経済改革です。手始めに「国营企業法」を八八年一月から実施し始めました。中央官庁による監督管理下に

あつた企業は大幅な権限を獲得し自主性と創意工夫が要求されるようになりました。

第三に文化・社会改革で、この分野のペレストロイカは活発に動き出しています。発禁の本が自由に出版される。

反ソ的作家とされた人の復権が行われる。自由な言論報道が行われるようになります。社会改革は反ウオッカ・キャンペーン、労働規律の強化、官僚の腐敗の摘発、取り締まり等が行われています。経済を活性化し生産性を加速化させようという狙いをもって進められているようです。

ペレストロイカを進める人びとの多くは、フルシチョフの「雪どけ」政策の下で青春期を過ごした人たちです。精神の形成期にスターリンの恐怖政治から解放された感動的な体験は強烈な印象を与えたようです。この世代を「雪どけ世代」とか、スターリン批判が行われた第二〇回ソ連共産党大会が開かれたことから「第二〇回党大会世代」とも呼ばれ、ゴルバチョフの協力者となっています。資料の「社会主義思想と革命的ペレストロイカ」抄訳ですが読んでゴルバチョフの思想を確かめて下さい。

ゴルバチョフがソ連体制の建て直しのため民主主義化、反対意見を認める言論の自由、国際政治における平和共存、国家の主権尊重、他国の国内政治への不干渉の声明などは、ワルシャワ条約加盟国の政治に大きな影響を与えました。かつて西欧的であつたこれらの国はブレジネフ・ドクトリン（社会主義共同体をなす国に反体制的動きがある場合は他家はこれを鎮圧して共同体の維持につとめる。制限主権論）をおそれていたが、ゴルバチョフのブレジネフ・ドクトリン否定の演説が八九年夏行われ、むしろ各国のペレストロイカを行うことを推進するような演説もあり、資料の第一図のように近々半年の間に政治変動が起こり、共産党指導者は追われ、自由化が行われるに至りました。ゴルバチョフのペレストロイカは東欧諸国には受け入れやすかつたのでしよう。もっとも社会主義の枠内という制約は譲っていないのではないかと思われまます。

(三) ノーボエ・ムイシレーニエ

ノーボエ・ムイシレーニエは、ゴルバチョフ書記長が一九八六年二月二五日の第二七回ソ連共産党大会における中

中央委員会政治報告の中で、新しい外交原則として打ち出したものであります。ゴルバチョフ外交の基本哲学となったものです。それ以降ソ連外交の基本哲学として実践化の方向を目指しているものです。ペレストロイカの進行に批判的な過激急進派ともいわれる人々からも、外交方面であげている成果には満足の意を表しているようです。相手方を守勢にたたせるような積極外交を行い、核軍縮外交では八七年一二月にワシントンで行われたINF（中距離核戦力）全廃条約に調印するという実績もあげて、従来のソ連外交とは異なってきたことを西側諸国に示してきました。

ノーボエ・ムイシレーニエ（新しい思考）についてゴルバチョフ報告の第一点は、世界の現状をどう認識しているかについて述べたところにあります。

それは地球的観点から人類の現状を考えたことです。

第一に環境汚染、大気汚染、海洋汚染、そして自然資源の枯渇が全世界的規模で人類の文明の存在の基盤に影響しつつある矛盾があることを指摘してその分析は深刻な結論に達すると問題を投げかけています。これは科学・技術革

命の結果、自然体系へ過剰な負担によって人間の行動の増大によって悪化させられてきたことを指摘しているのです。人類全体に影響しつつあるこの全世界的問題は一国やグループの国々の努力では解決できない。これには世界的規模での協力、大多数の国々による密接な建設的な共同行動が必要だ。この協力は、各国の完全な平等と主権尊重にもとづいて行わねばならない。それは一般化した約束や国際法の基準に従うことを基準としなければならない。そうしたことは我々が生きている時代の絶対的要請だといえます。

諸君が大学の講義の中でしばしば聞く、エコロジーや、アメリカのケネス・ボールドウィングが言った宇宙船地球号を思わせる考え方は。

このような世界情勢に核の対立によってつくられた情勢もある。現代の国際問題は極めて重大で根本的なものがあり、まさに地球上に住む人類は転換点にさしかかっている。従って問題解決には新しいアプローチや方法、異なる社会体制、国家、地域間関係の新しい形式が求められる。

そのため歴史・社会的発展の進路は、全世界的規模で諸国間、諸民族間に建設的創造的な相互作用がなければならぬ。相互作用は核による破滅を避けるため、文明が生き延びるために緊要不可欠だ。世界的な諸問題がすべての関係者の利益のために共同で解決されるために不可欠だ。今日の発展の現実主義的な弁証法は、二つの体制の間の競争と対立の結合にあり、また世界共同体の諸国間の相互依存への傾向の増大にある。これこそまさに矛盾をはらみつつも相互に依存し多くの点で一体をなす世界が、対立者の闘争によって粘り強い努力によって、いわばある程度、暗闇くらやみを手探りしながら形成しつつある方法なのである。といった現状認識から出発したソ連外交の方向を明らかにしています。

地球的世界的視点にたつたの問題提起や相互依存は、これまでソ連の指導者には見られなかった国際情勢に対する認識です。ソ連外交に新たに導入された発想ないし概念であるといつていいでしょう。

この基本認識にたつてゴルバチョフ報告は党の外交政策

戦略の基本的目的と方向について述べています。

第一に安全保障は報復への恐怖、いわゆる抑制又は抑止の理論の上には永久に築きあげることにはできない。全世界は核の人質になっている。安全保障は、もはや軍事的手段によってでなく、政治的手段によって確保される時代となった。

第二に安全保障は普遍的なものとなった。米・ソ間だけの安全はありえない。

第三にアメリカの軍産複合体とアメリカ国民とは利益と目的を同じくするものではない。両国が協力すべき客観的必要性が存在している。

第四に世界は急激な変化の過程にあり、永遠に現状を維持することは誰にも出来るものではない。国際的交流と協力の中で如何に生きるかが、我々の今日の課題である。

核軍拡が際限なく進めば、米ソの軍事的パリティが必ずしも軍事的抑制を果たすとは限らない、と述べています。

そして、ソ連の外交政策戦略の継続性を守りながらソ連共産党は現代世界の現実から出発する積極的な国際政策を

追及するであろう。外交政策の継続性といっても、原則や立場を頑なに守ることを単に繰り返すようなことは何の共通性もない。戦術的な柔軟性と相互に受け入れ可能な譲歩への用意、目的は対決ではなく、対話と相互理解にも配慮が望ましいことを強調しています。

この報告の中で次の言葉が非常に印象深く考えさせられました。

「現代世界はあまりにも小さくなり、戦争や力の政策に対して脆もろくなった。それを救い維持してゆくことは、幾世紀の間戦争と武力紛争を受け入れ許す基になってきた思考と行動を断固としてかつ決然と破ることなくしては不可能である」という決意です。

マルクスとエンゲルスは一八四八年「共産党宣言」の中で「人類一切の歴史は階級闘争の歴史である」と断じプロレタリアには祖国は無い、万国の労働者よ団結せよと述べ階級闘争の理論を展開しました。レーニンはマルクス主義にもとづく革命の達成のために、有名なクラウゼヴィッツの戦争論を熟読してヒントを得、職業革命家集団の共産党

ゴルバチョフのノーボエ・ムイシレーニエ（村田）

が前衛となって先頭にたち、労働者大衆を引っ張って革命を達成するという考え方をもちます。そしてプロレタリア独裁を行い、資本主義の最終段階としての帝国主義国家と対立闘争する考えをもちます。スターリン以降のソ連指導者はソ連を先頭とする共産主義国家と、アメリカを先頭とする帝国主義国家との国際的な階級闘争を展開して、熱戦にならなくとも冷戦時代を現出してことごとに対立闘争の姿勢をもちました。フルシチョフは平和共存をとえ、米ソの経済競争で何れが早く民衆の生活を豊かにするか競争しようとしてアメリカでブチあげ、一九八〇年代にはソ連はアメリカをしのいでいると断じ共産主義国家の勝利を語りました。現在一九九〇年になりましたが、フルシチョフの意気や壮とするものの、ブレジネフ後期からすっかりソ連経済は沈滞し、ゴルバチョフをしてペレストロイカを叫ばしめることになりました。ゴルバチョフが国内経済の建て直しをはかるためにも、旧来の思考方式では世界平和はもちろん、ソ連の経済の発展も巧くいかないということから、マルクス、レーニンとはいわなかったが、スターリン以降

の硬直化したソ連外交の対決姿勢の転換をはかることを余儀なくされ、また積極的に変化せざるを得なかったのではないかと考えさせられます。武力戦争の放棄です。

一九八六年五月ゴルバチョフはソ連外交に関する重要会議を行い、この「新しい思考」を外交関係者に徹底することをやっている。外交交渉を闘争と考え、力を頼み、原則に固執し、相手の事情など全く意に介しないというソ連外交の特質を改めて、自分自身の利害という点からのみ見ないで、特殊な事実をもっとまじめに幅広く考慮することが必要である。もし各国が自分の利益だけを追及し、相手に妥協したり、接点を求めたり、その相手と協力することができないならば、国際関係ではいかなる改善も達成することは困難だろうと、外交関係者に、従来西側諸国に極めて評判の悪いソ連式交渉術に反省と批判を加えています。

かくしてソ連社会の社会経済的發展を促進加速化するために、可能な限り最高の対外的条件をつくりあげペレストロイカをやるようにすることの必要性を説きます。ソ連の経済社会的發展が無くては国際的舞台でのソ連の立場を

守ることは不可能だと述べたものようです。

過去五年間ゴルバチョフの新しい思考にもとづく外交政策は、INF全廃やアフガニスタンからの撤兵、外国駐留軍隊の撤退、中ソ外交の回復、旧い考え方の老いたる軍首脳の解任、核実験の停止、軍事演習の相互査察など実証されつつあります。ゴルバチョフの「新しい思考」にもとづくソ連外交の進展に対して疑問のまなざしで用心深く見つめている人たちもいます。

同じ第二七回党大会で採択されたゴルバチョフ綱領と呼ばれるソ連第三次共産党綱領で「革命の輸出」や「平和共存」は「国際的な階級闘争の特殊な形態」といった文句は見られなくなったが、「資本主義の全般的危機は深まっている。その支配的領域は不可逆的に狭まりその歴史的滅亡の運命がますます明らかになっている」とか「現代資本主義のいかなる変形や策動も……歴史的に破滅を運命づけられている資本主義体制を全般的危機の状態から抜け出させることはできない。……帝国主義は腐敗し死に瀕した資本主義であり、社会主義革命の前夜なのである」などと記述

されています。

死に瀕した資本主義、地球上からなくなる資本主義世界との相互依存、相互安全保障となるとソ連の長期的世界戦略の道程における息継ぎにすぎないということになってしまふといった批判もあります。又、筑波大学の中川八洋教授のような厳しいゴルバチョフ戦略に対する疑惑も出てきています。果たしてゴルバチョフのペレストロイカはうまく進行するのか、ノーボエ・ムイシレーニエは唯の戦術なのか、アジア・日本に対してはどうか、など冷静に観察しながら見守ることが必要であらうと思います。

時間がオーバーしてしまいました。ソ連の動きは極めて流動的で眼がはなせません。こんごどのように変化してゆくか。ニュースに気をつけて下さい。尚、本日は大ざっぱな話でしたので、さらに勉強したい方は、この講義のため私が参考にした本を挙げて紹介しておきます。

(1) 中沢孝之著「ソ連の新戦略を読む」時事通信社、昭和六一年七月

(2) クリスチャン・シュミット著「ホイアー」朝日新聞外報

ゴルバチョフのノーボエ・ムイシレーニエ (村田)

部訳「ゴルバチョフ」朝日新聞社、一九八六年一二月

(3) M・ゴルバチョフ著・田中直毅訳「ペレストロイカ」講談社、一九八七年一月

(4) 加藤雅彦著「ゴルバチョフ革命とは何か」教育社、一九八八年六月

(5) ピーター・ジュヴィラー編・木村汎訳「ゴルバチョフのペレストロイカ」勁草書房、一九八九年一月

(6) 宇多文雄著「ソ連・政治権力の構造」中央公論社、一九八九年三月